

日本と水彩畫 (一)

丸山 曉 撰

前號の豫告に大氣焔の文字があるがそれは聊か不穩の感があ

る。余は單に自分の意見を述ぶるに過ぎ

ないのである。余は今本題を論ずる前に

余のこの度斯界に現れ、尤も誠實に、斯

道の發展を計らんと決心したる動機を、

述べやうと思ふ。讀者よ、暫く我が出樂

園の記より見よ。

出樂園。余が愛づる樂園は故郷である、

余が故郷を愛慕するの情は世の常なら

ざりき、無二の樂士永久の生涯は、この

幽靜なる境より、他に移さじと決した、

この決心ばかりは今日まで迷はなかつた

然して、余の熱鬧雜踏の都會を嫌ふの情

も、又尋常ならざりし。以前書生時代、

その無邪氣なる時にすら、都會生活を嫌

ふの情は、今と變らなかつた。故郷の風

景は我が意に適し、故郷の人情も我が意

に適して、彼等は彼等の住む茅屋の如く、

至て素樸であるが、茅屋の中に充てる温

暖は、又彼等も持つて居る。無量なる溫和の愛の霑ひに、我も

人も浴してゐる。訪問と來客。如何ばかり誠實を以て送迎す

るのであらう、主客の上に些々の拘束なく、待遇振りの手厚さ
心切き、快樂のあらん限りを盡さしめ、天眞の滴りは清水の如
く溢れておる、彼等の小天地なる郷には、世界の望みもこもり
ておる、こゝが世界であると満足して、他

を顧みない。ほゝ笑む愛のめぐみに慰め、

海見ぬ生涯を決して恨まず只年々の凶豐作

に眉蹙むる彼等こそ、實に神の愛て見てあ

る。このやうな趣味津津たる田園の生活を、

なすべく更に決行の觀念を高めたは、過ぎ

し我が在歐の時であつた。麗しくして閑雅

なる英國の田園、或は幽靜なる佛國の田舎、

それに學べる田園畫家の生涯。彼等は活々

としたる大自然の美に浴しつゝ、日々を送

る穩靜の生涯は、如何に余の同情を促かさ

しめしぞ、それと同時に余は理想の隠れ家

を故郷に建てた。その隠れ家は歸朝と共に

實現した。そして理想に近き生涯を五年送

つた。歐米の畫堂を経めぐり、或は水彩畫

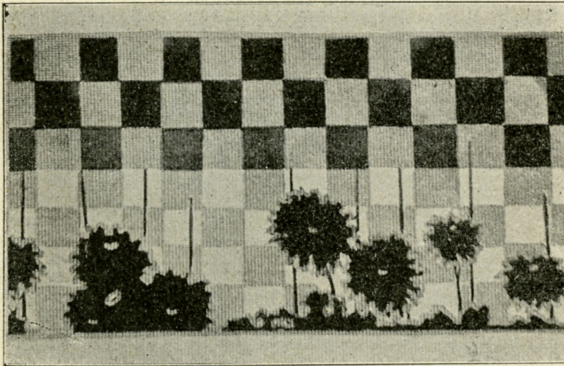
家を訪問し、ありとあらゆる水彩畫の研究。

それより得たる智識は決して少くない。歸

朝後の五ヶ年も、全く水彩研究であつた。

譬は我が幼稚馴みの親しき友のやうである、

交れば交る程親しく。我の幼稚時代には、彼も幼稚であつた。



衣 箱 永 倉 逸 秀 會 キ ガ ハ エ

今のやゝ勝れし眼を以て接すれば、彼れもやゝ勝れたる趣きを示すのである。彼の深秘なる胸奥を見出すは、甚だ至難であるが。彼は打ち解けて、其の深秘をも物語りそふてである。我も愛撫し彼も愛撫して、今では離れ難なの交を結んだのである。されど今は別離の止むなき運命となつた。それには種々なる動機があるが、先づその重なるものは樂園の故郷には、自然の外語る友なき事。平和となつた今日。斯道の爲めに活動し、大に其の發展を計る事。之れ等が余をして樂園を捨て、都に出てしめた動機である。大下氏は余の親友、しかも同じ流れを汲める人。是よりは共同一致斯道の爲めに献身的に盡さんかな。

いざやこれより本題の意を述べん。

日本と水彩畫。水彩畫は文字の如く諸君の既に知つて居らるゝので別に説明するの要はない。等しく彩畫であるが、水彩と云ひ油繪といふも繪畫の目的からは、何れも全一であるが、油繪は水彩畫に比して、着彩其の他に多少の相異があるから、これを説明しやう。油繪は、油を以て繪具を製し、丁度漆のやうな性質のものとし、これを強き毛の筆に着けて、布、板類、厚紙、壁等に、厚く塗付けて描くのである。其着彩に光耀があつて、寫實といふ點より見れば、水彩は遠く及ばぬのである。出來あがつた畫の上で、水彩は比較的淡泊で、油繪に至つて濃厚である。譬へば、水彩畫は白梅の中で鶯を聞くやうて、油繪は深紅の牡丹の中で、燕の囀りを聞くかのやうである。然し余は決して、油繪を排斥する譯ではない。余は寧ろ日本の凡てが歐

米の如く開けて、濃厚なる油繪も、白梅の香に浴するやうな感
を以て、迎へらるゝ様になる事を、望むのであるが、然し今の
日本の多くは、濃厚なる油繪を迎ふる感念が至て乏しく。却て
瀟洒なる水彩畫を迎ふるものが多い、それは何故であるか。先
づ一口に言へば、日本人の氣質が濃厚でなくて、至て瀟洒で
淡泊であるからであらふ。日本人の淡泊なるものを愛するは、
水彩畫ばかりではない、飲食物から、庭園住家をはじめ音楽、
詩歌園藝の類迄、瀟洒にして淡泊なる處に興味を持つて居る。
之れ等が西洋畫の本原なる歐米と異なる處で、彼等の萬事が凡て
濃厚である。それ故繪畫迄濃厚となつたのであらふ。日本
人の淡泊なる氣質は、如何なるものが作つたであらふか、之れ
は實に研究すべき問題である。凡ての方面に涉りて研究するは、
中々至難の事ではあるが概言すれば、余は日本の自然と宗教及
び儒教といふものゝ感化をうけて作られたのであると思ふ。猶
次號に於て少しく説で見やう。

尙讀者に一言す。水彩に關する記事はこの誌の續かん限り各
號自分の意見を述ぶる筈である多き讀者にありて。意見を異
にし、又は質問の點あらば、遠慮なく申送られたく。そは余
の切に望む所である。

* * * * *